昭和100年敗戦80年　大戦は避けられたか？

戦争名称をめぐる混乱

- 大東亜戦争
- 太平洋戦争
- アジア・太平洋戦争
- 大東亜・太平洋戦争
- 第二次世界大戦
- 先の戦争（大戦）
- 大祖国戦争
- 抗日戦争
- 15年戦争
- 昭和戦争

開戦をめぐる名言・珍言

- 「はじめの半年や一年はずいぶん暴れてご覧に入れます」（山本五十六、1940/9）
- 「支那の奥地が広いと言ふなら、太平洋はなほ広いではないか」（昭和天皇、1941/9/5）
- 「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさはぐらむ」（昭和天皇、1941/9/6）
- 「虎穴に入らずんば虎子を得ずと云ふことだね」（昭和天皇、1941/10/20）
- 「出かかった小便を途中で止めるようなことはできませんよ」（海軍参謀、1941/11/13）
- 「ジリ貧を避けて却つてドカ貧に陥らないよう注意を要する」（米内光政、1941/11/29）

私の初期の認識
・原因は陸軍の中国での暴走
・海軍は陸軍に引き込まれた
・ルーズベルトは日本の参戦を誘導

ChatGPTに「開戦を防ぐ」を問う
・非常に難しいが、中国に(1915) 対華二十一カ条要求の仕方によっては太平洋戦争は避けられたか。
・欧州の帝国主義的侵略を踏襲した要求だが、どう見ても**かなり過剰**な要求。大隈内閣VS山県有朋
・真っ先に反対したのは中国ではなくて、米国だった
・石原はこの撤廃が必要。日中関係と日米関係を好転

1935陸軍は「華北分離工作」
・1937年１月、石原は華北分離工作の中止を決定
・ソ連軍事強化衝突懸念その際米英からの支援要
・中国だけでなく、米英との関係も悪化してしまう

1931年満洲事変と1937年盧溝事件：日中戦争
・現地で石原が主導、日中戦争には反対
・武藤章はあなたを見習って実施と反論

種々調査をすると
・陸軍も秋丸機関調査により「米国とは戦わず」を基本戦略とした。
・それを海軍が無理やり太平洋戦争にしてしまった。敗因は海軍
・山本五十六が真珠湾攻撃をしないなら連合艦隊司令長官辞任で

夏目漱石の三四郎
・日露戦争の戦勝によって、世の人はみな、これで日本も一等国へ仲間入りしたと自惚れムードに浸っています。そんな様子を斜に見て、先生はこう言い放ちます。
・**「滅びるね」**すでに明治40（1907）年から。夏目漱石は４０年後の敗戦を予感していた。

武藤らの判断
・中国は強い一撃で、国民政府を屈服可能
・華北分離で資源と市場を確保しソ満国境に備える
・ソ連軍内で粛清米英の目線がドイツへ、好機と判断

1939年ドイツ第二次世界大戦（武藤陸軍省軍務局長判断）
・**ドイツが勝利の傾向**東南アジアの植民地が独へ
・1940年日独伊三国同盟、翌1941年４月には日ソ中立条約
・日独伊ソの４国でユーラシアを制し、米国の介入を防止

ところが陸軍の期待に反し、
・独は英を降せないばかりか、昭和16年６月にソ連へ侵攻
・昭和16年７月に南部仏印への進駐８月米は対日石油制限を発表
・陸軍は、南部仏印進駐が英米をさほど刺激するとは思っていなかった。ソ満国境の関特演が、石油全面禁輸に繋がっているとは、思いもしなかった

日本軍の構造

陸軍

- 軍政…陸軍大臣（陸軍省）
- 軍令…参謀総長（参謀本部）

海軍

- 軍政…海軍大臣（海軍省）
- 軍令…軍令部総長（軍令部）

杉山元：便所の扉
永野修身：ぐったり大将
嶋田繁太郎：海軍大臣東条の腰巾着

陸軍の暴走に政府、海軍、宮中、世論までが引きずられたしかし早期開戦を主張し続けたのは、**実は海軍主流派**

・海軍で主流派中の主流といえば永野修身（1880~1947）軍令部総長
・永野は昭和天皇に対米早期開戦を進言これは他の海軍首脳部予想外
・永野は「勝ち得るや否やもおぼつかなし」と答えて天皇を驚かせた天皇側近の木戸内大臣らは「あまりに単純」「捨てばちの戦い」批評
・組織利害を主張する分権的な政治体制だった。対米戦までの約1年半で、実に10回もの「国策要綱」が策定
・永野は重要な会議で「戦機は今、3年後は不明」「英米を屈服させる手段は無い。結局は国際情勢の変化と国民の精神力による」
・永野が避けようとしたのは海軍がメンツ。対米戦に自信なしと正直に告白すれば、海軍そのものが存在意義を失う。
・最終選択を東条内閣に任せた。「政府一任」である。軍は政治に従うべきという「サイレント・ネイビー」の伝統に従った
・陸軍にとって対米戦は第一義に海軍の戦争、隣の部署の重要案件だった。だから日米交渉での譲歩を、頑強に拒否し続けられた。

永野大将の言葉です。
－－－